

海老原宏美さんの遺稿

気ままにエッセー 次号につづく…と言いたところでしたが、この「アナザボイス」が、今号を持って終了するとお聞きしました。

とても残念です。

この冊子の発行者であるJVUNを立ち上げた佐藤きみよさんと私は、同じ障害です。きみよさんは、呼吸器を使いながら地域生活を切り開いた大先輩。文字通り、「命をかけて」地域を切り開いてきた方です。

私は、海外旅行が大好きで、呼吸器ぶら下げていろいろな国へ行きましたが、日本ほど、医療的ケアユーザーが当たり前のように地域で暮らしている国は多くありません。「そんなに重度になってまで生きている意味はない」「そんな体になってまで人の手を借りて生きていきたいなんてワガママだ」「地域社会に、国に貢献できない人間に費やす金はない」と言う様な価値観に押し流され、生きることを断念する人が、海外では多いのです。

今の日本の障害福祉制度がここまで整っているのは、まさに、佐藤きみよさんのパッションとアクションのおかげと言っても過言ではないでしょう。本当に、感謝しきれません。

コロナで人との接触が遠慮される今の世の中ですが、そのせいで、本当に必要な人と人とのつながりまで失いそうで怖いのです。

この「アナザボイス」がなくなっても、アナザボイスを発し続け、目指すべき社会を目指し続けたいと思います。

今までありがとうございました。

病院のベッドからこの原稿を送った直後の2021年のクリスマスイブ、きみよさんを追うように、えびちゃんも天に召されてしまいました

昭和48年1月13日 第三種郵便物承認(毎月10日発行) HSK通巻600号 2022年3月10日発行

人工呼吸器使用者のための通信 spring 2022

HSK アナザボイス

No.100 最終号 ANOTHER VOICE - Japanese Ventilator Users Network -



夢と希望を

ありがとう

Contents

- きみよさんとかけぬけた日々/岡本雅樹 2P
- 追悼 - きみよさんを偲んで 3P
- きみよさんが遺したもの 20P
- 『呼ネットコーナー』連載終了のお知らせ 41P
- 『気ままにエッセー』連載終了のご案内に代えて/勝又文博 41P
- 『気ままにエッセー』最終回/海老原宏美さん 遺稿 42P
- 編集後記/岡本雅樹 43P
- 会員・寄付者一覧 44P

HSK通信アナザボイス No.100 (2022年3月10日発行) 昭和48年1月13日 第三種郵便物承認(毎月10日発行) HSK通巻600号
編集人:ベンチレーター使用者ネットワーク 代表 岡本雅樹 〒003-0022 北海道札幌市白石区南郷通14丁目2-2-1階 NPO法人自立生活センターさっぽろ内
TEL 011-867-5699
発行人:北海道障害者団体定期刊行物協会(HSK) 【定価 300円(税別)】

ANOTHER VOICE No.100

広報担当より

海老原宏美さん遺稿

今号を作成するにあたって、きみよさん追悼文の原稿締め切りが海老原さんの入院と重なってしまい入稿に至りませんでした。

しかしながら、本誌連載「気ままにエッセー」を締めくくりに書かれた最後の原稿の内容が、「アナザボイス」終了を惜しみながらもきみよさんへのリスペクトに満ちていて、はからずも海老原さんからきみよさんへ送る最後の言葉として胸に沁みます。

海老原さんは、亡くなる直前までお仕事をなさっていたそうです。

ご自身が書かれた通り、最後まで「アナザボイス」を発信し続けたんですね。ご冥福をお祈りいたします。

気ままにエッセー 最終回

次号につづく…と言いたところでしたが、この「アナザボイス」が、今号を持って終了するとお聞きしました。とても残念です。

この冊子の発行者であるJVUNを立ち上げた佐藤きみよさんと私は、同じ障害です。きみよさんは、呼吸器を使いながら地域生活を切り開いた大先輩。文字通り、「命をかけて」地域を切り開いてきた方です。私は、海外旅行が大好きで、呼吸器ぶら下げていろいろな国へ行きましたが、日本ほど、医療的ケアユーザーが当たり前のように地域で暮らしている国は多くありません。どの国でも、「そんなに重度になってまで生きている意味はない」「そんな体になってまで人の手を借りて生きていきたいなんてワガママだ」「地域社会に、国に貢献できない人間に費やす金はない」と言う様な価値観に押し流され、生きることを断念する人が、海外では多いのです。今の日本の障害福祉制度がここまで整っているのは、まさに、佐藤きみよさんのパッションとアクションのおかげと言っても過言ではないでしょう。本当に、感謝しきれません。

コロナで人との接触が遠慮される今の世の中ですが、そのせいで、本当に必要な人と人とのつながりまで失いそうで怖いのです。

この「アナザボイス」がなくなっても、アナザボイスを発し続け、目指すべき社会を目指し続けたいと思います。

今までありがとうございました。

海老原 宏美